
私が勇者を倒すまで。

二月満

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私が勇者を倒すまで。

【Nコード】

N1097G

【作者名】

二月満

【あらすじ】

敬愛する我が国王直々に命ぜられた任務は、何と勇者と共に魔王討伐！．久々の実戦と余りの名誉に打ち震える私の前に現れた勇者は有り得ない様な人間だった……！！．．．所謂BL、MLと言う奴です。主人公はオッサン！

勇者、見参（前書き）

こんにちは。

はたまた、お初にお目にかかります。

これは始め短編集に乗せようと思っていたのですが、どうも長くなりそうなので一つの小説として立ち上げました。

かなりの不定期更新が予測されますが、生暖かい目線で見守ってやってくださいまし。

勇者、見参

漸く、出会えた…………。

「お前が、勇者か…………？」

私が仕えるマディリック公国王直属の神官が受けた神託により、この村に訪れてから実に2ヶ月余りが経とうとしていた。

「まあ、俺をそう呼ぶ者もいるが…………？　ククク、何だオッサン。俺に何か用か？」

—— 全ては、あらゆる悪と魔の誘惑の根源、魔王を倒すために。

王直々に魔王討伐の勅命が下った時、私は余りの事に肌が泡立つのを感じていた。………… 齢42にして騎士としての久々の実戦が、このような名誉ある行為であるとは。

……………なのに。

実際は地図の端も端にちよこり、と炭で印した様な辺ぴな村に押し込められ、明日来るのか3年後なのかさえ分からないが取り敢えず神がのたまうたから等という勇者が来るのを、只待つのみ。

後々勇者に聞いた話に寄ると、この村を通るつもりは愚か、まずここに人が住んでいるかも知らなかったらしい。

…………… まあ、百歩譲ってそこは妥協しよう。どんな形であれ、出会え

たのであればこれもまた運命。

しかし。

「ククク、良いゼエ。俺はアンタみたいな人間、嫌いじゃないからア。」

その2ヶ月間、ずっと待ち続けていた男がこれだとは。

……どうしても信じたくは無かった。

「……何の話をしている。」

私は訝しげに勇者を見やる。その男は、私より幾分若い様な風体をしており、俄かに勇者とは信じがたい服装であった。……そこいらの自販機に、夜中急にジュースが飲みたくなつて買いに行く時の様だ。もつとも、この村にはそんな物はないのだが。

それでも私が男を勇者と判別出来たのは、その背に負う破魔刀、ブルーシャイン故だった。

あれは、選ばれし者にのみ神より授けられる破魔武器の一つ。その者の手の内のみにて力を発揮し、その者死す時共に消える。……私は残念ながら持ち合わせてはいない。

勇者はニタニタとした笑みを浮かべながら近付いてくる。私は咄嗟

に身構えた、が……消えた!?

「なんだア、怖いじゃねえか。……手、放せよ。」

気付けば完全に勇者に背後を取られていた。いつの間に……! 後ろから抱き付くように、左手は私が手に掛けた剣から指をやんわりと引き剥がし、右手では尻を撫で回してくる。

……ゾツとした。こんな男に背後を取られた悔しさに勝って。まさか、この歳になってから男に尻を撫でられる日が来ようとは。

勇者は私の後ろでクククと不愉快な笑い声を漏らすと、私の耳元をねつとりと舐めあげた。

「なア……。良いコト、しようぜ……オッサン。」

「辞めろ!」

私の我慢は限界だった。力に任せて勇者……これをそう呼ぶ事すら汚らしい! を、投げ飛ばし、一気に抜刀、尻餅をつくその男の鼻先にぴたり、と切っ先をくつつけた。

「冗談も程々にしろ、小僧……。」

実際そういう年齢なのかは定かでは無いが、私より年下なら皆小僧だ。

「あーあー、怒っちゃって。そんなんじゃモテないぜ。」

勇者はまだニヤニヤ笑いながらまるで剣の存在を気にしてなどいな

いように手をヒラヒラと振り、尻を払い立ち上がった。私は呆れて剣を下ろし、鞘に納めた。今思えば少し、大人気なかったかもしれない。40も過ぎた今、既に人生も半ばだ。少し位余裕を持たねば。

「それにさ……アンタから誘ってきたんだろ……？」

奴は急に、声を低め私を優しく抱きながら耳元に囁いた。悔しい事にとてつもなく良い声だ。こんな奴に、勿体の無い。……ん？

……おかしい。何故か体が動かない。腕が上がらない。腰にも力が……。

「何をする、放せこの変態が！」

「嫌だね。クククク、こんな抵抗されたら、屈伏させてやりたくないよなア。」

「な……！」

辞めろだの放せだのと叫ぶ私の声を無視して、勇者は己より一回りは大きいであろう私の体を軽々と持ち上げ、その後騒ぎ疲れぐつたりとした私をそのままに、いかがわしい空気で満ちる村外れのテントまで悠々と歩いていく。

……人がいない。勇者は極めて機嫌が良さそうだ。私は怒りに顔が歪む。こんな屈辱初めてだ。薄暗いその汚れたテントはどうやらこの男の私物らしかった。中に投げ入れられる。

「ッッ……！」

直ぐさま勇者が私の上に申し掛かってきた。私はここで漸く己の本
当の失態に気付いた。ああ、何故あの時剣を収めてしまったのか…
…！

「…………ふっ。」

勇者は私の両腕を頭上に纏め、片手で押さえ込むと、体重をかけて
くる。その目は完全なる捕食者のものであり。それは私の中に今ま
でに無かった新たな恐怖に似た感情を生み出した。……しかし。

……畜生、このままでは、このままでは……！！

「ぬああああああああああああああああああああ！！
嘗めるなこの糞ガキがあああああああ！！！」

私は渾身の力で勇者のバカかと思う程強い握力から両腕を振りほど
き、勢いに任せ勇者の右頬をぶん殴った。

勇者は吹き飛び、テントの左側を破壊した。

「——ッ！」

出会ってから初めてみせる歪んだ顔をして腕を付き起き上がる勇者
を横目に見ながら、自分も体を起こし、勇者から距離をとり剣の柄
に右手を沿わせる。

「…………お前のような者が神に選ばれし救世主……？ ハッ、笑わせ
るな。ならば、神は何をもって勇者の選定を行ったのか問うてみた
いのものだ。…………私は、お前と肩を並べ共に邪悪なる者を討ち果
たさんと我が王に遣わされて来し者。この意味が分かるか、小僧よ

「？」

勇者は上体のみ起こした状態で顔を上げ、私の目を見た。

「……………あー……、アンタ、あのバアさんの手先か。」

殴られた右頬に構わず乱れた前髪を掻揚げながら、勇者はうんざりした様な声を上げた。……………どういう事だ？

「バアさんだと……………？ 何の話だ。」

我が王への愚弄ではあるまい。そもその性別が違うため想像は容易だ。

「……………ん？ 違うのか？ 夢の中に出て来るヒスババア。俺の……………否、アンタもか。の、旅の原因だ。」

「……………もしや、大祖女神ネルクレバの事ではあるまいな。」

私は直接「見」た事はないが、我が国の祭る女神ネルクレバは、何かを伝えんとする時、その者の夢に現れると言う。姿は地上の者には考えも及ばぬ程美しいらしい。

「あーあー、ソレだ、多分な。全く、面倒臭えにも程があるぜ、魔王退治なんてよォー。まあ、行かなきゃ仕方ねえんだけどよ。」

「……………なっ……………！」

何なんだこの小僧は！ こんな名誉な事を、「面倒臭い」だと！？

「あー、まあオッサンには解んねえだろーなア。ククツ、剣一筋云十年……だろ？ クククツ。」

「……それがどうかしたのか。」

怒りを抑えつつ、低く唸る様に言葉を吐き出す。

「どうもしねえよ？ 只、真面目だなーッてだけさ。」

「ほざけ。お前の様な輩に何が解る。」

勇者のへらへらとした態度は、私の神経を余さず逆撫でる。

「クスクス、良いよなア、オッサン。俺、プライド高そうな奴、好きなんだよねエ。……なあ、一寸俺に抱かれてみねえ？ きもちイーぜ、目茶苦茶な。」

「黙れ！ これ以上私を愚弄すると切り捨てるぞ！」

私は怒りに任せ、一気に剣を引き抜いた。

「フフ、そんなにカリカリしてたらこれから先保たないぜ。神託つつたら、オッサン、俺に付いてくんだろ？」

……！！

そ、そうだ。怒り余り失念していた。私は、これから彼奴とく共に
>魔王の討伐をせねばならぬのだ……！

「……チイツ、何と言う事だ……！」

神は我を見放したのか……………！！

「ククツ、ひでえなあ、オッサン。アンタ、剣士なんだろ？俺は、命に変えて守るべき勇者様なんだぜ？魔王を倒すつてのが、アンタの使命なんだろ？」

……………。

……………そう、なのだ。幾ら私の腕が立つからと言っても、勇者の破魔武器がなければ、魔王は倒せない。故、悪を滅ぼさん為には、己が身を滅ぼさんとも勇者を魔王の元へ送り届けねばならないのだ。……それが、私の役目であるからが故。

しかし等という言い訳は有効ではない。守るべき家族すらいない私ではあるが、しかし、それ故に祖国への忠誠は人一倍厚いと自負がある。そしてまた、その国に暮らす者に平和をもたらすこの使命にも。

ならば、その天務全うするのが剣士の役目。これは、隣りでニヤニヤと笑みを浮かべる愚か者ではなく、我が王、また我が国の民の為、……そして、己が為だ。

「……………ふう、勇者よ。」

「何だア、オッサン。」

私は勇者の目を見据えた。奴は出会った瞬間と変わらず不愉快な笑みを浮かべている。大方、私の決意を察したのであろう。

「お前はハッキリ言っただけに食わん。が、付き合っただけ。我が祖国の為に。」

「ククッ、そう言うと思ったぜ。俺の名はレオン・キルリード・デアバロス。エレナ出身だ。」

「……レオンか。貴様に似合わぬ良い名だな、勇者よ。私はジズハルク・ルイス・ウルファイだ。出身はサルローズだ。」

お互いに名乗り有ってから、勇者が右手を差し出した。握るのは正直不愉快だったが、まあこれから共に旅する者同士だからと自分を宥めて己も右手を差し出して、それを握んだ。

「よつと。」

急に握んだ右手を引かれ、体勢を崩した私に、勇者は又もや押し掛かってきた。

「辞めんか、貴様何度も何度も……！」

「クククッ、オッサンが不用心なのが悪いんだぜ。」

勇者は相変わらずの笑みを見せながら私の耳元に顔を寄せた。

「これから……宜しくな、ジズハルクさんよ。」

私の魔王退治は、かなり前途多難な様だ。

漆黒の馬く前く（前書き）

少し長くなったので前後編に分けさせて頂きまず、すみません

漆黒の馬<前>

ラピスが疲労している。

当然だ。あの辺境の村より、速度は無いものの大の大人二人を乗せて数日の間駆けて来たのだ。

「すまない……。」

私は純白の愛馬の背に触れ、優しくブラシをかけながらここ数日の苦勞を労った。

「おい、オツサン。早くしろよ。」

私の大切な白馬の疲労の最大の原因は、街外の宿屋の馬舎の入口に寄り掛かり、間拔けた顔で欠伸をした。……しかし、怒ってはいらない。このような奴でも、一応神に選ばれし男——即ち、勇者であるのだから。

「……黙れ。少なくともコイツとは貴様より長い付き合いだ。優先度の違いも解らんのか。」

「おー、ひでえ。勇者様に向かってそれはねえんじゃねえのか？」

……。

……奴の言う事も尤もなのだ。私は一介の騎士に過ぎず、そして目の前の男は「勇者」なのだから。本来なら尊び、守り、奉るべき存

在。……しかし。

「私は貴様を認めてはいない。」

ラピスの頬を撫でてやると、私の最愛の馬は優しく目を細め、その鼻を私の手に擦り付けた。

「フフン、オッサンが認めなくても俺が勇者つつう事實は変わんねえよ。行くぜ。」

私は大きく一つ溜め息を吐くと、ブラシを馬舎の壁に戻し、もう一度ラピスの頬を撫でてから勇者に付いてその場を後にした。

「——で、何処に行くのだ？」

「取り敢えず酒、だろ。」

ニヤ、と笑う勇者の横顔を見ながら私は早くも後悔した。……何故先に用件を聞かなかったのか。彼奴と酒なんぞ飲みに行くくらいなら、ラピスの側に居てやりたかった。

「……ならば、その前に新しい馬を買いに行かないか？」

流石にラピス一頭にこれ以上の距離を規格外の重りを背負った状態で走らせるのは良心が咎める。

只でさえ私があ村に留め置かれた3ヶ月間、かなり自由にさせていたのだから、いきなりのあの移動には相当堪えている筈だ。

「あー……。別に良いが……。俺、金ねえよ?」

……まあ、そうであろうとは思っていたが。宵越しの金は持たない種類の人間か。

「……金なら、私が王から預かってきた物がある。かと言って、決して膨大では無い……貴様の小遣いにするつもりは毛頭ないからな」

「……チッ。」

あからさまな勇者の舌打ちに内心自分も舌打ちする。小金位なら自分で稼げ、糞ガキが。

「ああ、ダリイ。面倒臭え、もうオッサン勝手に見て来てくれないか？ どうせ俺が見たって馬とか解んねえし。」

……そうしたいのはこちらだって同じだ。何が楽しくてこんな奴と行動を共にせねばならぬのだ。私だって面倒臭い。しかしこれは全て我が馬の為。

「……貴様、相性の悪い馬の上に乗って振り落とされても私は知らぬぞ。」

「ならアンタの馬に乗るさ。」

「ラピスは私以外の人間に手綱を取らせない様に躡られている。」

勇者はまた短く舌打ちをしたが、黙って私の後ろをついてくる。勝った……。妙な高揚が体の内から沸き出てきたが、直ぐに沈める。流石に大人気ないではないか、その様な感情は。

「着いたぞ、勇者。好きな馬を選ぶが良い。」

宿屋から数十分程歩いた所に、馬を扱う行商人が来ているとは事前に聞き知っていた。

「おやア？ その背中の剣、兄ちゃん勇者かい？」

退屈そうに番をしていた小太りの男が、物珍しげに勇者に声を掛けた。年齢は……私と同じ位か少し上の様だ。

「まあ、そう呼ぶ奴もいるぜ……。」

勇者はニヒルな笑みを浮かべ、男に近寄り、その頬を愛しげに撫で始めた。……な、何をやっているのだ、彼奴は！？

男は、顔を赤く染め、勇者から目を逸した。勇者はすかさず腰の辺りに腕を回し、甘い声で囁く。

「なあ、俺馬つて解らないんだよな……優しく教えてくれよ。ついでに格安で売ってくれば今晚空けてやっても良いぜ……。」

「は、はい……！」

勇者………貴様……！！

辞めんか！ と私が一喝する前に、勇者は男に連れられて奥の方に行ってしまった。私は一際大きく溜め息を吐き出す。

ふと、一頭の馬が目に入った。

全身漆黒のそれは、他の馬と少し離れた場所に隔離してある様だった。私は、吸い寄せられる様にその馬に近付いて行く。

「あー、その馬、ダメだよ？」

急に幼い声が聞こえて来て、私はバツと振り向いた。

「驚いた？ アハハ、ゴメンねー？」

それは、少年の様であつた。栗毛の馬に跨がっていたが、ひらりと降りてこちらに向かつて来る。

「……ダメ、とは？」

私は少年に問うた。どうやら此所で働いているらしい。自分が乗っていた馬を手早く近くの木に繋ぐと、麦藁帽を被り直しながら私の側で立ち止まり、黒い馬を見やる。

「うーん、見ての通りかなり良い馬なんだけどね、誰にも全然懐かないどころか人が近付くと暴れちゃってさ。」

そうか、と私は馬を見やる。その馬の瞳は、孤独の色をしていた。

「……おい、オッサン。帰るぞ。」

哀しいかな此所数日で嫌と言う程聞いた声に振り返る。

「……良い馬が見付かったのか？」

勇者は、焦茶の馬の手綱を引いている。……どうやら見繕って貰った様だ。馬を知らない者が選ぶそれでは無い。

「ああ、ククツ、金払つといってくれ。……ん？ ソレ、何だ？」

勇者は私達が見ていた黒馬に気付き、目を細める。

「……勇者、貴様に操れる馬では無い事だけは確かだ。」

「……んな事言われつと益々気になるア。……ま、振り落とされちゃ叶わねえし、今回はこの馬で良いぜ。」

よっこいしょ、と、勇者は気怠そうに馬によじ登ると、男に「夜、酒場で待つてるぜ。クハハハッ！」等と言い置き、よたよたと去って行った。

「……アノ人、本当にオジサンの仲間？ って言うか本当に勇者？」

隣りの少年がぼつりと洩らした。……全く同意だ。奴はこの数日の間に、幾ら私がレクチャーしても、乗馬についての何も上達しなかった。私は本日何度目かの溜め息を吐き出し、男に勘定を頼んだ。

昨晚、勇者は戻らなかった。まあ良い。お陰で久々に好く眠れた。未だ日の出無い内に目覚めた私は狭く硬い宿のベッドの中で一つ寝返りをうった。

移動中は全くと言って良い程眠れなかった。原因は言わずもがなの男である。泊まる宿も無い為、奴のテントで寝泊まりしているのを良い事に、私が少し油断しようものなら直ぐに押し倒そうとしてくるのだ。

一々反応するのも面倒になり、放っておけば良いのではないかという妙な境地に一瞬達した事もあったのだが、それも奴が只エスカレートするのみという現実の前に遇えなく費えた。

私はベッドから降りて、軽く着替え部屋から外に出た。この街には未だ後数日滞在するつもりであるから勇者の散らかった荷物は今は取り敢えず無視する。

「お早う、ラピス。」

馬舎のラピスに餌をやり、その隣りにある小さな広場で朝の鍛練を始める。

1、2、3、4とリズムを作り、剣を振るう。少しづつペースを上げ、見えない敵に刃を突き立てる。何時の間にか夜は完全に開けていた。

「あつ、いたいた、オジサァーン!!」

何処かで聞いた声に剣を持つ手を止めると、そちらに目をやる。

「ああ、昨日の……。」

どうかしたのか、と声を発する前に、少年は慌てた様子で喋り始めた。

「オジサン……ああつ、昨日の黒い馬をつ、あの勇者サン乗って何処かへ……！ あ、あいつ何時誰を攻撃するか解らないから……！！」

私は直ぐさま剣を鞘に収めた。

「場所は分かるのか！？」

「わつ、分からない！ 昨日からジミー……店長も戻らなくて！！」

「……………乗れッ……！！」

あの糞勇者が……！ 一体何が目的だ……？ 私はラピスを馬舎から出しながら飛び乗り、上に少年を引き上げると、取り敢えず街の中心部に向かい走らせ始めた。

「オ、オジサン。」

「何だ！？」

「い、今言つ事じゃないと思うけど………良い馬だね………」

「そんな事思っている暇があればあの馬が行きそうな場所でも考える……！！ 勇者のバカではあの馬は制御出来ん筈だ……！」

「そんな事言つても分かんないよオ……！！」

ラピスと私は幾度と無く朝の街人と衝突しそうになりながらも、徐々に中心部に向かって駆けてゆく。

「あ、いたっ!!」

「何!？」

少年の声に急いでラピスを方向転換させる。

「何処だ!？」

「ほらっ、アレ! 人がいっぱい集まってる……!!」

……………拙いな。

かなり遠目にだが、それでも黒馬は見るからに暴れていた。自らに跨がる無礼者を振り落とさんとして。近付くにつれ、集まる人々から悲鳴に近い声が上がっているのが分かる。

ヒギイイイイイ

突如、黒馬は嘶きとは程遠い様な奇声を発して、野次馬が騒ぎ立てる一角に、猛然と突っ込んでいった。

「ああっ!!」

「……………チッ。」

少年が私の腰を抱く腕の力を強くする。きつと無意識なのだろう。

野次馬達が一斉に離散し始める。それが私達の進行を阻み、苛立ちを募らされる。

「この糞勇者！！ 今直ぐ馬を降りろ！！！」

可能な限り近付き、声を張り上げる。直後ラピスから飛び降りて、彼奴の方に駆け出した。続かんとする少年を手で制してラピスを頼むと言い置く。

「おお、オッサンじゃねえか。」

黒馬に振り回され、ほぼ宙に浮いている様な状態にも関わらず勇者は呑気な声を上げる。

「ふざけるのも大概にしておけ！ 早く馬から降りろ！！！」

そんな勇者の態度に血管がはち切れそうな私は、それでも努めて冷静に勇者に叫ぶ。

「いやア、出来れば俺もそうしたいんだがな。………… 馬が止まってくれなきゃなア…………。」

黙れと叫びそうになるのを懸命に堪えて、私はばさりと上着を脱いだ。上着を右手に、その俣馬の前に回り込む様に走る。

「オジサン、馬の前に出たら危ないよ！！！」

「その様な事、私が心得ていない筈無かるうが！！！」

一気に黒馬までの距離を詰め、新たな対象物を見つけ突進してくる馬に向い、また私も速度を上げる。

「オイッ、オッサン、何を……！」

「危ない……！」

勇者が目を見開き、反対に少年はギュッと閉じた一瞬間、私と漆黒の馬は、接触をした。

「……………あ……………？」

次の瞬間、私の目に飛び込んで来た勇者の顔は、信じがたい物を見た時のそれであり、今度は少年のそれもまた同じであった。

「…………… 今後は一切の助太刀はせぬ。よく肝に銘じておけ。」

馬は、今や完全にその歩みを留めていた。

私の目の前には勇者の顔。距離は、己の脚と奴のそれが触合う程。

尻は馬の漆黒の背の上に。手の中には私の上着の端。残りは、

馬の、美しく長いその顔を、隠すかの様に。

「オ、オジサン……………！！！」

少年がラピスを引いて走り寄ってくる。その大きな瞳には、微かに何かが滲んでいる。

私は啞然とする勇者を置いて、上着を馬の顔に巻き付けた俣地面に降り立った。継いで、我に帰った勇者も慎重に降馬する。

「…………… なぁオッサン。何で、こんなあつさり？」

俺の言う事は全く聞かなかったくせによオ、と勇者はじとりと黒馬を見詰めた。

「馬を始め、動物の中には視界を奪うと大人しくなるものが多い。」

「分かつてるよオっ、そんなのっ！でも、危ないよオ。」

少年は堪えていた涙をポロポロと零し、私の腰に抱き付いた。

「……すまない。」

あつたばかりの彼に、此処までの心配をかけてしまうとは、騎士失格だ。優しくその頭を撫でてやりながら周りを見渡すが、こっそりと見ていたらしい野次馬の残党が、ほっとした様子で語り合っているのみで、大した怪我人も出ていない様だったので取り敢えず一息つく事が出来た。

「……さて、勇者よ。」

私は、その場をコソコソと立ち去ろうとしていた背中を見過ごさなかった。

「……何だ？」

不機嫌そうな勇者の瞳を、鋭く射返す。

「惚けるのも大概にしておけ。……取り敢えず先は理由を聞こうか？」

「……チツ。」

勇者は逃れられないと悟ったのか大人しく口を割った。

「ジミーのオッサンから聞いたんだよ、その馬の事。なんせ、すげえイワク付きの馬らしいじゃねえか。」

曰付き……？ 人に懐かない馬とは聞いていたし、今し方見て確認したが。少年の方を見ると、彼もまた解し難いといった表情であった。

「曰とは……？」

私が眉根を寄せ問うと、勇者は意外だと言う様に説明を始めた。

「オッサンが言うにはよ、ソイツ、山奥の何とかって教会だか何だかっていう場所がある日魔物に襲われたって時に、唯一その場に残ってたらしいぜ。そんで、こんな見た目だしよ、悪魔が乗って来た馬じゃねえかって言われて、金持ちやら何やらの間を点々とした後、あのオッサンが買い取ったらしくってよ。高い値が付くのを期待してたらしいが、……ククツ、誰にも懐かねえもんだから早いトコ厄介払いしてえつつつてたぜ。」

「……この馬に、そんな秘密が……。」

ぽつりと少年が洩らす。

「……で？ この馬の事は分かった。では何故貴様がこの馬に乗っていたのだ？」

私が勇者を見据えて言うと、奴は大きく溜め息を吐き出し、言葉を

繋げた。

「なあに、少しばかり懸けたんだよ。酒場のマスターとな。ジミーのオッサンが飲み過ぎで潰れた後よ。さっきの馬を乗りこなせたら今日の酒代タダにしてくれるっつーからさ。んで、マスターと一緒にオッサンを運んで、いざ馬に乗ったらば、……ククク、後は知つての通りさ。全く、俺とした事が。」

私は顔をしかめた。まさかそんな下らない理由でこんな目に合わせられるとは。少年の顔も似た様なものだった。

私は黒い馬の今は見えない頬を、上着の上から撫ぜてやる。そのまゝ、首、背へと。こうして触れると、本当に良い馬だ。馬は、少し身動きをした。

「取り敢えず、帰ろうか。」

少年に言えば、彼は小さく頷いた。ラピスはその俶少年に預け、黒馬は私が引く事となった。勇者は私と反対側に立たせる。

馬は、視界が塞がれているとは言え、余りにも静かであった。

<前編・終>

漆黒の馬<後>

黒い馬を引き、店に戻ると、店主ことジミーと、勇者の言っていた酒場の主人である男が二人で並んで立っていた。

やはり勇者も連れてくるべきだったかと、私は目を細める。勇者には、少年の持っていたラピスの手綱を渡し、宿に連れ帰らせている。居られると面倒だと思ったのだが……。昨日一睡もしていないらしい勇者に愛馬を預るのはかなりの抵抗があつたが、今はそれより仕方が無かつた。己の馬を信じる事しよう。

「ちよつと！ ジミー、マスター！ これどう言つ事！？」

いきなり食つてかかうとする少年を軽く諫め取り敢えず馬を繋ぎ、顔の上着を取り除いてやる。馬はぶるりと顔を振り、私を見据える。私は無意識にその頬に手を伸ばすが、彼の鼻面にそれを拒まれた。

私は彼らに向き直す。……。今まで勇者は、こういった状況に遭遇した事は無かつたのだらうか。

「……この度は、うちの勇者が迷惑を掛けた……。済まないと思つて
いる。」

「……………！？ オジサン！？」

二人に向い深く頭を下げる私に、少年は信じられないといった様に私に振り返り、声を荒げる。

「謝らなきゃいけないのはこの二人の方でしょ!？」

「……否、分かってはいたのだ、私は。奴の性格を。なのに、野放しにした。」

只、「勇者」と名の付くからには、多少の良心なり常識があるうと、高を括っていたのだ、私は。

そう言くと、少年は険しい顔をした俛俯してしまった。その小さな手が、私の服の袖をそつと掴む。そして、ぽつり、でも、と言葉を紡ぐ。

「勇者様と一緒に旅してるオジサンを賭け事に巻込んだり、危険な目に合わせたり、迷惑かけたりしたら、この国の人間として駄目でしょう……?」

少年はやはり彼らしい。私はうつすらと笑みを浮かべる。優しい気持ちになるのだ、彼を見ていると。

「……何か、勘違いしてるみたいですね、君は。」

ずつと口を噤んでいた酒場の主人が、突如声を発した。私にはなく、少年に向ってだ。

「……勘違い、とは?」

再び黙り込んでしまった少年の変わりに問う。

「……私は、勇者殿に賭けなど挑んでいませんよ? むしろ、反対です。勇者殿の方から、私に賭けを申込んでいらっしやっただんです。」

「
顔を見合わせ、二人は互いに困った様な顔をした。

その瞬間、私は自分の額に青筋が立つのが分かった。

「……………あの……………冀勇者が……………！！ 今直ぐその首へし折ってやる！！」

私は怒りの余り、そこに居た馬の上に飛び乗った。「後で返す！」と叫び置き、乱暴に馬の脇腹を蹴り、宿に向かって走らせる。

「オジサン！！」

少年が叫んだが、それも霧散していった。今は、耳に届きすらしない。馬は、低く唸ったが、走るのを辞めたりはしなかった。

宿までほんの数分で到着する。馬を降りて馬舎に向う。……………。

……………そんな所で何をやって居るのだ、彼奴は！？

「勇者ああああ！！ 貴様、自分のやった事の意味を重々理解して居るのだろうか！！？」

隣りで馬がぶるりと震えたが、今はそれに構っていられない。

勇者は手綱を持った俣背に乗ろうとし、ラピスのかなりの抵抗を受けている所の様だ。当たり前だ。私が言った事を忘れていいのか、はたまた言われたからこそ、ムキになってやっているのか……………。否、今はその様な事、どうでも良いのだ。

「あー？ オッサンか。ククツ、早かったな。」

「早かったな！？ 早くもなるわ、貴様この様な事………！！」

私はわななく。握った皮の手綱が、みしりだの、ギチギチだのという音を発した。

「……ふーん、相変わらず短気だねー、クククツ。で？ オッサンは俺にどうして欲しい訳？」

「貴様、心得ておろうそんな事！ 今直ぐ街へ行って謝罪して来いこの糞勇者が！！」

私は怒りに任せ大声で捲し立てる。

「ハアアア！？ 謝んのかよ、ダリイー。」

「怠い！？ 何の罪も無い街の民を恐怖に陥れて於いて、怠いだと！？ 貴様それでも勇者と名乗る者か！！！！」

勇者は心底うざったそうに私の方を見た。瞬間、僅かに目を見開くそれからクツクツと笑出した。私は勇者の行動の意味が分からず眉根を寄せた。

「……………何がおかしい。」

「否、オッサン。何にせよ、俺は馬に乗っただけだぜ。只のイワク付きのな。馬に乗る事に罪があんなら、オッサンだって同罪だろ？ 気付いてねえみてえだな。ククククツ。」

勇者の言葉に、私の眉間の皺は深くなる。…………正直、解し難い。

「……………どういう事だ？」

「ハハッ、オッサン、自分の乗って来た馬、よく見てみるよ。」

勇者にいわれて始めて、手綱の主を見やる。そして、黒曜の様な瞳と目が合い、私は勇者の言葉を理解した。

「……………あ、あ、」

「たまたま言う事聞いてくれて良かったなー、オッサン。つーか悪魔云々って言われてる馬に乗って良かったのか？　ククク。」

そうだ。私はあの時黒馬を繋いで……………そして、ずっとその隣りにいたのだ。当然だ。頭に血が上り過ぎて気がつかなかった。

私は右手で目の前を覆った。何という事を…………。街の住人は、この馬の事を知っているだろう。そして、それは取り敢えずは収拾が付いた。しかしまた現れたと聞いたら…………？　嗚呼、頭が痛い。

「無意識とは言えども、己の力量に見合わぬであろう馬に乗り、民に不安を与えた罪は重い……………ああ、我が敬愛なる王よ、私は罪を犯した……………！」

ぶふん、隣りで黒馬が鼻を鳴らした。そして絶望に浸る私の頬に自らの鼻面を寄せる。

「……………！」

勇者と私は目を見開く。ラピスは不満そうに小さく鼻を鳴らした。

「あーりゃア、オッサン、懷かれちまったのか？」

私は戸惑った。何が起因してこの気難しい馬が私に「懷く」などといった事が起こったのか。ラピスが勇者の腕から逃れ、私の周りを忙しなく左へ右へと動き周った。

「あつ、オジサン！……って、ええ！？」

「どーしたルカ、……！！」

「二人共待つて下、さ……い……。」

私の後を走って追って来たのであろう、三人は私の様子を見て絶句した。黒馬はそんな周りの状況など気にせず、私の頬や頭に尚も自分の鼻を擦り付ける。

「……わ、私はどうしたら良いのだ……。」

この街を今直ぐにでも発つのが最良であることは間違なかった。しかし、このままでは余りにも無責任過ぎる。そしてこの馬は一体どうなる？

「あの、オジサン。」

いつの間にか少年……ルカと呼ばれていたが……が、目の前に立っていた。黒馬は私から顔を放し、警戒する様に睨み付けている。私よりずっと付き合いが長い筈なのだが……。

「コレ、どういう………?」

「解らん……。」

再び、黒馬は私に体を寄せて来た。ラピスはやはり不機嫌そうだが、しかし、私は理解不能であるからと言って拒む事も出来ず、するが俛になっている。

「凄いですね……あんな暴れ馬を手懷けてしまうなんて……。」

「全くだな。まアどおーも一方的に好かれてる様に見えるがよ。」

しかしどうする。仮に私が何らかの理由によって此の馬から奇跡的に好意を受けているのだとしよう。しかしそれは、逆に私自身が此の馬の未来を奪ったという事にはなるまいか。

本来馬というものは知つての通り普段はとても大人しく優しい動物だ。だからこそ真逆の「暴れ馬」等という単語が出来た訳であり、暴走する馬は異常といった世間の目を形成するに至つた訳だ。

しかし、その反面馬はとても繊細な生き物だ。一度訂正出来ないまでの衝撃を与えてしまうと、それを完全に忘れさせるのは容易では無い。

……つまりだ。ラピスは私以外の人間のみをその背に乗せることはない。それは訓練の賜であるが、黒馬にもそれと同等の事が起こつたのではなからうか。

ならばこの馬は、

「……ねえ、オジサン。もうすぐ、この町を発つつもりなの……？」

「あ、ああ……。」

急に少年ルカが目線を下げて呟いた。私からは俯いたその表情を窺い知る事は出来ない。

親指を互いに絡ませる彼は一度瞼を伏せた様だった。次の瞬間、その意志の強い瞳とばかり、目が合った。

「じゃあコイツ、連れて行ってあげてよ！　ねえジミー、いいでしょ！？」

大きな声をあげて振り返ったルカに、ジミーは一瞬びくりと体を震わせてから目を見開いた。

「ルカ、お前正気か！？　その馬、いくらしたと思ってんだ！」

そしてルカの言葉を理解した瞬間、声を張り上げる。

「だって！　もう仕様がないでしょ！！」

……が、一蹴されて、うなだれた。

「……済まない……。」

私はジミーの様子を見て目線を下げた。このような状況に陥った事がない為か、どの様にしたら良いのか分からない。

「……オジサンは謝らなくて良いんだよ。どの道、その馬は買い手がいなかったんだし。オジサンに付いて行った方が絶対に幸せになれるでしょ？」

「……ッ、ああ！ 分かったよ、連れて行けよ！ 但し、この前の馬は返して貰うぜ！！」

私は内心深く溜め息を吐いた。しかし、それが何に依るものなのかは自分でも解らなかった。小さく、恩に着る、と呟く。

「……え、おい、そうしたら俺はどの馬に乗ったら良いんだよ。」

それまで呆、とこちらのやり取りを聞いていた勇者が突如声を上げた。

「……自分で撒いた種だ。なんとか彼奴に好いてもらうことだな。」

不満げな勇者に答えながら黒馬の首を叩くと、その生き物もまた不満そうに鼻を鳴らした。ラピスは全員の後ろで1回、跳ねた。

「ねえ、オジサン、この子に名前付けてあげてよ。まだ無いんだ。」

「……そうか。ならば……。」

しばし、黙り込む。視線が私に集まった。

「……お前の今迄が暗闇であったというならば、之よりは光がさせば美しい。……名は、デイブレイク——黎明が良かろう。」

そう言い、馬の漆黒の立髪に手を延ばせば、突如、黒馬……否、レ

イメイの体が黒い光を放ち始めた。

「!？」

その場にいる者全てが目を見開いてその光景を凝視する。

光の中の「モノ」は、紫の波動を放ちつつ徐々にその姿を露にしていた。

「……人、か……!？」

ジミーが零すようにそつ口にした時には、それは最早完全に馬では無かった。

「あ、貴方は……!!」

右手で光を軽く払って現れた長身の男を見て、私は身震いした。

「……ピースフル・ブラック！」

彼は、長くしなやかな黒髪を払い、私を見据えた。その圧倒感に、誰もが息を留めた。

「え!？ マジかよオ！」

いち早く復活したジミーがピースフル・ブラックは10年前死んだはずだろう!? と叫ぶと、黒い男は、ふん、と鼻を鳴らした。

「……散れ。」

す、とピースフル・ブラックが指をジミーに突き付け、睨み付ける。

「う、あ!？」

ジミーの体がふわり、と宙に浮く。首をかき笔る動作を繰り返すジミーを見て焦りが生まれた。

「ピ、ピースフル・ブラック!」

お辞めになられよと走り寄れば、彼はちらりと私の方を見た。瞬間、どくり、と心臓が跳ねる。

ピースフル・ブラックは、それ程までに圧倒的な存在であった。

彼の話をするには、少し過去に逆上らなければならない。

……十数年前、この世界で唯一、且つ強大な力をもった人間がいた。それが、ピースフル・ブラックである。

後の世に、「魔術師」と呼ばれるそれは、当時の騎士や王に仕える者全員の憧れの的であった。

今は、神官等がそのほんの端切れを使って王が世の中を導く手助けをしているが、その比では無い。

ピースフル・ブラックが口ずさむだけで、この世には恵みが溢れた。

ピースフル・ブラックが吐息を吐けば、嵐も凪いだ。

彼は、正に王に匹敵する存在であつたのである。

勿論、私も彼に心酔していた。黒い長髪とコートに風を受けて、魔の者を一掃するその者は、未だ幾許か若く、騎士になつたばかりであつた私の目に強烈に焼き付いて、離れなかつた。

……しかし、そんな彼は、ある日あつけなく喪失されてしまった。

簡単な任務だと、一人出掛けて行つて、……帰つて来なかつたのである。

彼の向かつたであろう場所には、巨大なクレーターが只残つていただけだつたそうだ。

誰もがその場所を知る事を望んだが、誰もそれを叶える事は出来なかつた。王が口を割らなかつたからだ。

その後、国は大いに荒れた。魔物の来襲に加え、内部の氾濫があつたからだ。……ピースフル・ブラックの喪失は、王の意図的なものであつたと思い込んだ者達は、この国全土に及んだ。

その者達に、王の「多量な魔力の温存のあるかの地に民を向かわせるのは王の取るべき采ではない。」という言葉聞き入れる耳は無かつた。

私は、人の出払つてしまつて閑散とした城内で、王の身边警護をしていた。……魔物が王の命を狙っている可能性を考えたのだ。今、もし王を失えば、この国はどうなる？

只でさえピースフル・ブラックの喪失で憂えているこの国が、急進的な影響力の消滅で瞬く間に魔の者に滅ぼされてしまうのは目に見えていた。

城の中では、王と、私を含めた少数の騎士、それに幾人かの使用人のみがほてりを放つ眼下の街を見下ろしていた。

……と、些か喋り過ぎたようだ。ここからは割合するとうとう。

私の心配通り、城には魔の者の襲来があった。ピースフル・ブラックの喪失から実に1年の月日が流れた後だった。魔物は巨大で、その力は測り切れないものだった。しかし、その邪悪な姿を見た市民達は、我を取り戻して参戦してくれた事で、王の命は守られたのだ。

人の心とは不思議なものだ。

それから国の内政は安定し、1年の間に荒れ果ててしまった土地も、少しづつ再興していった。

ピースフル・ブラックの事はそれと同じくして、少しづつ人々の記憶から失われていったの、だが。

フン、と鼻を鳴してピースフル・ブラックはジミーを開放した。地面に放り出された男は、激しく咳込む。

「何故……？」

私はピースフル・ブラックに話し掛けた。本来なら正式な対応をしなければならぬのだろうが、場合が場合だけに、仕様がなかったのだ。

「何故？ ……何故とは。」

ピースフル・ブラックは目を細めた。私は深く息を吐きだす。

「聞きたい事は多々ありますが、取り敢えず何故、貴方が生きているのか、を。」

「……ああ、私は、生きている。」

「んな事きーてんじゃねえよ。」

「ジミー黙って！」

怨みがましくピースフル・ブラックの背中を眺めていたジミーがぼそりと呟けば、ルカがぴしゃりと征した。

「……私は……、死ななかった。だから生きている。……かの悪魔に……呪いをかけられた……。」

「……馬になれ、と？」

私の問いに、さらさらとした濃やかな髪を揺らさせる。

「……私は、エドナ出身だ。」

……？

ピースフル・ブラックの言いたい事が分からない。エドナとは、地名だろうか。私は耳にした事が無いが。

「ハハハハッ！ アンタ、エドナの男か！！ 偉大なる魔術師様もこれじゃ奴隷人形じゃねえか！！」

今まで傍観を決め込んでいた勇者が、笑い声をあげた。私は、奴隷という愚劣な言葉に眉根を顰めた。

「……どういうことだ？」

私は勇者に問う。

「あー、オッサンは知らねえだろうなア。俺も旅を始めてから知ったんだ。エドナってエのは、ウチの国の下の方にあるちっちゃい村でな、その男は、名付け親に一生縛られちまうんだよ。」

縛られる？

「まあア、カンタンに言うと、そいつの命令は何でも聞いちゃうんだよ。血がそうさせるとか何とかでサ。」

勇者はニヤニヤといつも嫌らしい笑みを浮かべている。

「……私は……世間的には死んだ……。……だから、名前の効力が失われた……。」

「んでエ、呪いかけられて、オッサンに名前を付けられたって訳だ。

」

「……わ、私に。」

確かに、私は先程名前を付けた。しかし、それは黒い馬だったのだ。

「あー、あつたまかてえなア、オッサンはよオ。呪いは、取り敢えず馬になって、名前を付けられたら元に戻るってエ内容な訳だ。魔物はコイツがエドナ出身って知ってたんだろっよ。」

ああ、理解した。私はピースフル・ブラックに目を戻した。

「……醜惡な豚どもに、私を差し出す気は、無い。……私は、お前を認めた。」

「……私の名は、黎明、だ。」

漆黒の馬く後>（後書き）

いやあ、やたらと時間がかかってしまいました。

取り敢えずここで漆黒の馬編は終わりです。

次は小ネタを挟もうかと考えておりますので、もうしばし、お付き合いを。

(ちみっとぶれいく) うみにいこう！(前書き)

これは勇者とオッサンが出会ったすぐ後くらいのお話です。

なんか今読み返すとちよつと無理がある内容かなとも思いますが…

…。

寛大なお心でもってよろしくおねがいします><

（ちみっとぶれいく）　うみにいこう！

「……なあオッサン。」

ラピスに揺られながら、勇者は私の背に頭を預ける。森の中にかすかにある道を、私たちはひたすら前に向かって進んでいた。

「なんだ？　勇者よ。」

体を揺らしてそれを振り払い、視線だけ後ろを振り返る。

「暇。」

そう言うとき勇者は私の腹に腕を伸ばし、抱きついた。私はそれも振りほどく。

「あーあー！！　だつりイーよ！　魔王退治だつりイーーよ！
あー海いきてえ海。うーみーいーきーてーえー！！」

「暴れるな、勇者！　ラピスが驚く。」

「いーじゃん暇なんだよ！　なあオッサン、海ねえの、海！」

「海？　そんなもの、」

あるはずない、と口にしようとした瞬間、森が急に開け、視界が光でいっぱいになる。何かが視界の奥できらめいた。

「……!？」

「うおー、海じゃん!！」

勇者はラピスから飛び降り、奇声を発しながら水辺に向かって走り出した。

海……？ 確かに、打ち寄せる水面に白い砂浜、強い日差しは夏の海を彷彿とさせるが、ここは森の中だ。地図を広げてみても、現在地から海岸線に到達しようと思えば、裕に3日はかかると思われた。

「湖か……？」

しかし、そんなもの地図には描かれていない。

「おーい、来いよオッサン！ プライベートビーチだぜ!！」

勇者ははしゃいで服を脱ぎ捨てている。私はラピスを降り、手綱をはずしてやった。まあ、深くは考えないことだ。この地図は神官達に貰ったものだが、かなり昔のもののようなのであるし、昨年、一昨年は雨期が長く台風も多かったため、ここに湖ができたのかもしれない。私も水辺に近づいて行く。

「いやっほー!！」

勇者は全裸になると水の中に飛び込んだ。私は「あれー、しょっぱくねえ海だ」などとほざく勇者の脱ぎ捨てた服を拾い集め、畳んで近くにあった木の下に荷物とともに置いた。

「オッサン！ 何やってんだよー!！」

こうして遊んでいるのを見ると、勇者もまだまだ子供だ。

「ああ、後で行く。ラピス！」

私は自分の荷物からブラシを取り出し、ラピスを水の中に入れて、体を洗ってやる。

「けっ、つまんねえー。」

勇者はそういうと、遠くに泳いでいつてしまった。

ラピスを洗い終わると、自分も服を脱いで体を洗う。この先何があるか分からないのだ。ここでしばし休息するのも悪くはない。ラピスは砂浜でごろりと体を倒して砂に首をこすりつけた。

平和だ……。

この湖はなんだか空気が澄んでいるように思えた。

「おおーい、オッサン！」

勇者に呼ばれて、私は目を覚ました。どうやら眠ってしまったらしい。不用心な、と思ったが、不思議とここには魔の者のいる気配がないような気がしていた。勇者が急ぎ足で浜を駆けてくる。

「なんだ、オッサン裸で寝てたのかよ。犯せばよかった。」

「な……！」

私は勇者の言葉に一瞬唖然とするが、いつものことだと頭を振る。

「あーそうだ、湖の底に何かあるぜ。でっけー神殿みたいなやつ。」

「神殿……？」

こつちだと湖に入っていく勇者の後を追う。振り返ると、ラピスは鼻を鳴らした。私は傾きかけた日を映す湖に、足を踏み入れた。

「少し行ってくる、ラピスよ。」

そしてひたすら、勇者の後を追いかけて泳いでいく。ちょうど湖の真ん中あたりまで泳いで、勇者は止まった。

「つーかさ、これ海じゃなくね？」

「ああ、貴様がなんと言おうと、これは最初から湖だ。」

「ちえー、だりい。神殿はこの真下だぜ。」

そう言うのと、勇者は勢いをつけて潜り始めた。私も後を追う。

数メートル潜ると、確かに何か建物があるのが見えてきた。柱が四本、箱のような形だ。金のようなもので装飾もされているようだ。私は神託があつた時に訪れた神殿の様相を思い出した。

勇者が私に目配せする。私は頷いた。二人で神殿に向かって泳いで

いく。

神殿の入り口部分につくと、勇者がかかる扉を叩く。見ると、大きな扉の左右の端にレバーがついている。成程、同時に下さなければ開かない仕組みか。私は勇者がわざわざ私を呼びに来た理由が分かった。大方、この中に宝の山があるのではないかと思っているのだろう。

勇者が右のレバーを手に取ったので、私は少し泳いで左のレバーを持つ。そして、二人同時にレバーを動かした。

ごごごごと地響きがして、扉が開く。勇者は嬉々として中に飛び込んで行った。続いて、私も中に入る。

ふ、と体が重くなる。

「あ？ 空気があるじゃねえーか。」

私たちは神殿の大理石の上に立っていた。水は入り口から入ってはこないようだ。一体どういう仕組みになっているのだろうか。

「ああ、どうやら宝はないようだがな。」

私はふん、と笑った。神殿の中には細かな部屋はなく、奥に小さな祭壇があるのみだった。

「まだわかんねエーよ！」

勇者は大理石の一つ一つをこんこんと叩いて回っている。下に空洞を探しているようだ。

「ふう、無駄な事を。」

私は奥の祭壇に向かった。祭壇の形式や、使われている石の種類から見て、大祖女神ネルクレバを祀るものだろう。

我が国で産出される紅の宝石、リバイナにはネルクレバの御意思が宿るといわれており、ネルクレバを祀るどんな祭壇にもそれが置かれている。

「……汚れているな。」

私はリバイナ石を手に取り、積もった埃を払った。後ろでは勇者が「なんでだよ！　なんでねえーんだよ、シケてんじゃねえかよ！」と騒いでいる。

「ふう、布があればよかったが……。まあこれで綺麗になったであろう。」

私は石を祭壇に戻した。すると、急に石が光を放ち始めた。私は思わず目を閉じる。

「ああ？　オッサン、なにしてんだ？」

光を見とめた勇者がこちらに走ってくる。リバイナと同じ、紅の光は神殿全体を包んだ。

——レオン、そしてジズハルクよ。

光の中、不意に脳内に声が響く。

「あー？ この声は……。」

—— わが名は大祖女神ネルクレバ。そなたたちを導きし者。

「ネル、クレバ……！」

始めて聞く御声に、私の全身は震えた。勇者はだるそうに頭を掻いている。

「ああー？ 何の用だよヒスババア。」

「勇者、貴様！」

—— よいのです、ジズハルク。この者を勇者としたのはわたくしですから。

「いーんだってよ、オッサン。」

ふん、と勇者は鼻で笑った。どうもさっきの宝の件を根に持っているようだ。

—— レオン、久しぶりにあなたの顔を見に来ました。

「はあ？ それだけかよ！ 早く元に戻せってえーの。」

勇者には礼義というものはないのであろうか。私と接する時とまったく同じ様子の勇者を見て、私は心底ため息をつきたくなる。

—— レオン、新しい仲間はどうですか？

「ああ、オッサン？　ぜんぜんやらしてくれねえ。」

「誰が貴様なんぞに！」

私が声を荒げると、ふふ、と笑う声が聞こえた。

——安心しました。この国は今、少しずつ滅びの道をたどっています。それを食い止めるのはレオン、あなたにしかできないことです。

「うつせえーな、同じこと何回も言うんじゃないよ。」

ああ、やはり奴は勇者であるのだ。ネルクレバの言葉に、私は酷く思い知らされる。

——そしてジズハルク、あなたはレオンを導きし者なのです。

導きし者？

私は首をかしげた。私たちを今導いているのは地図であって私ではない。

——いずれ、わかる時が来るでしょう。

赤かった世界が、少しずつ色を変えていく。段々と、思考が、声が遠くなっていく。

——また、あいましょう。

最後に世界は金色に光り、私は意識を手放した。

「……ん、う……ん？」

私は自分の体を何かが這うのに気付いて、目を覚ました。……なんだか今日は寝てばかりだ。

「おう、起きたかオッサン。」

瞳を開けると、目の前には勇者の顔。……裸だ。当り前か。勇者の頭の後ろには鬱蒼と生い茂った木々が見える。あの湖はネルクレバが作り出したものだったのだろうか。

「さつきは失敗したからなア、今回は抜かり無いぜ。縄持ってた俺って天才？」

「……は？ え、あ!？」

な……！ 手足が縛られている！！ 私は焦って体をよじった。

「なーに、オッサンは何もしなくていいからよオ、まあじっとしてけって。」

「え……あ、あ、ああ……!!!!」

> おわりん <

(ちみっとぶれいく) うみにいこう！(後書き)

オッサンが犯されたかどうかはご想像にお任せします。

獣の国<前>

……こうして、私達には新しい仲間ができた。

レイメイという男は私の記憶通り寛大且つ圧倒的に有能。勇者と正反対だ。

そう、名付けに縛られている筈の彼が何故王に仕えられたのか？という私の問いには、名付け親が死んだからだという返事が帰って来た。……ピースフル・ブラックとは、王に賜った名であるらしい。益々私が彼を縛ってしまった事を複雑に思わずにいらなくなってしまった。

少年ルカやジミー、酒場の店主に見守られて私達は朝靄の中をまた歩き始めた。

……馬が人間になったため、とうとう徒歩移動を余儀なくされたのだ。

ここからは長く長く山林地帯が続く。抜ければ、他の国、はたまた荒れ地、又は魔の者の巣窟だろうか。つまり、地図は用無しになったのだ。既に先程の街で売り払って来た。

ラピスには人間の変わりに、大量に買い込んだ食料を背負ってもらっている。

皮肉に聞こえるかもしれないが、順調な、余りに順調な旅立ちだった。

「なあー、オッサン！ 今日も雑草かよ！」

「雑草と言っな！ 山菜だ。身体には良い。」

ぎゃきゃきゃきゃと獣だか鳥だか分からない何かが叫び声をあげる薄暗い森を歩いて早数週間。今日も森の樹々の隙間にテントを張って、夜の食事の準備をする。勇者もレイメイも料理が出来ないので、これは私の仕事だ。

野菜は勿論干し肉ももうすぐ底をつきそうだ。……完全に加減をしない勇者のせいだ。腹が減る年齢なのは分かるが、状況というものがよめないのか貴様は。

「……ジズハルク。」

後ろから呼び掛けられる。彼の横にはうつすらと緑がかった火の玉が浮かんでいた。

「どうされたか、レイメイ？」

レイメイは私が彼に敬意を含んで話すのを嫌うが、こればかりはどうしようもない。

「……もう、なくなった。」

「……食料が？」

ああ、と頷くレイメイを見て、私は大きく溜め息を吐いた。

「はぁ！？ もう？ これからどーすんだよ！！」

「どーすんだよではない！ そもそも貴様が加減せず食べるから……」

勇者に苛つく私をレイメイが諫める。

「……ジズハルク。」

す、と頬を撫ぜられると、怒りが抜けていくのだから不思議だ。これも魔術のひとつなのだろうか。

「……狩りに、出るしか……ない。」

呟いたレイメイに、私は小さく頷いた。……できれば、避けたかったのだが。

「……仕方ない、ジズハルク。」

「チツ、だりいな。」

「勇者！」

……私達は、翌早朝テントを畳んだ。

私が狩りを避けたかった理由は幾つかある。

この森の中で三人が離れ離れになる可能性を作りたくは無かった、ということもそのうちの一つだ。

特に勇者は見失ったが最後戻ってくる保証はほぼ無いと思ってよいだろう。

深い森を更に分け入る。すると、急に視界が開けた。

「お、見ろよオッサン。デッケエドラゴンだぜ。」

岩肌も露なほば崖の様な山の山頂に、お決まりの如く、エメラルドグリーンのドラゴンがどしりと座り込んでいた。目はじとりとこちらを捉え、舌を忙しく動かしている。

時折その大顎から漏れる炎は、肉眼にも天まで黒煙を巻き上げているのが分かった。

「んつとうに、デッケエな。」

昨晚うざいだの何だの言っていた勇者の目は、今や爛々と輝いていた。

「……あれは、鶏肉の味だ。」

「マジ!? れーめーちゃん物知りだねエ! ……じゃあ、決まり

だなア。」

……ああ、困った事だ。何故どうしても、皆アツくなり過ぎる。

「行くぜ!!」

「擬化……竜羽。」

「……！ 待て、勇者、レイメイ!!」

私の叫びも空しく、勇者は人間技とは思えない尋常でないスピードで、レイメイは魔法で己の背に翼を生じさせて、瞬く間に目の前から消えていった。

「……倒したところであの大きさの肉塊をどうすると言っただ……!!」

私はまた大きく溜め息を吐きだして、ラピスに飛び乗った。

幸いなことに、私は勇者を見失わずに済んだ。

と言うのも、私がラピスと共に山頂に登るまでに、先ずドラゴンの巨大な首が頬を掠めていき、次に黒光りする羽根が、腕が、足がと上より降ってくるのだ。ぽっかりと浮かんだように平らな山頂に降り立ってみれば、巨大な肉塊が今正に皮を剥かれようとしていた。

「おせーぞオッサン。」

「……勇者、貴様が尋常でないのだ。」

しかし、これだけあれば当分の食料には事足りるだろう。余った分は勿体ないが置いていくしかあるまい……か。

「ジズハルク、」

私を見とめたレイメイが、ドラゴンの皮を剥ぐ手を止める。長い指の生えた白い手は、今やドラゴンの血肉の色に染まっていた。

「レイメイ、服の袖が汚れてしまわれるぞ。」

私はラピスから飛び降り、そこら中に散らばった鋼鉄の板のようなドラゴンの鱗を踏みレイメイに近づいて、彼の長いローブの袖を捲り上げた。そして自らも上着の袖を引き上げる。

「私も手伝おうぞ。」

ああ、とレイメイは頷いた。後ろで勇者がラピスに近づいていくのがちらりと見えた。あの馬鹿、また無駄な事をしようとしているのか。

……何度もラピスに振り落とされた勇者がようやく諦めた頃、ドラゴン是一只の肉になった。肉と脂に分け、今食べる分を残し細く切って並べる。干し肉にするのだ。

「オッサン、早く焼けよ。」

勇者はうずうずとした表情でこちらを見る。自分でやろつという気は全くないらしい。

「レイメイ、火を起こしていただけないか。勇者貴様も少しは働け。」

勇者はフンと小馬鹿にしたように笑った後、ふわと大きく欠伸をすると、その場に横になり眠り始めた。よくこの血の香の中で眠れるものだ。

「ジズハルク。」

視線を戻すと、レイメイが私が用意した組み木に魔法で火をつけていた。偉大なる力をこのようなことに使うのはいささか気が引けるのだが、勇者の荷物の中にあつたマッチは、食料より以前に底を尽きていたのだ。

「ああ、かたじけない。」

私はレイメイに礼を言って、火の上に鉄板を設置した。ほどなくして、その黒い板から煙が立ち始める。私はドラゴンの肉が置いてある場所に帰り、脂と残しておいた肉の塊を手にした。

「勇者、起きろ。焼き始めるぞ。」

脂を焼けた鉄板に落とすと、爆ぜるすさまじい音と共に煙が噴出する。私はそれを手早く板全体に広げ、その上にドラゴンの肉を落とした。

「おおー！ 久しぶりの肉だぜー！ー！」

肉の焼けるにおいにつられて、勇者が目覚めます。最近見た中で一番の笑顔だ。

そして見えた、
彼奴の後ろに。

「ソラガミ様が殺された、ソラガミ様が殺された！　呪われろ、呪われろ！」

群れる群衆、大地に響く叫び声。

動物の皮を被ってはいるが、あれは人間であろう。それぞれ手に武器を携えた夥しい数の毛皮の男たちが、私たちの周囲を取り囲んでいた。

「げえー、めんどくせえ。イケてねー奴らばっかじゃん。」

勇者は眉根を寄せながら、いつの間にか手に持っていたドラゴンの肉にかじりついた。

「ソラガミ様の肉をを食らった！　殺せ！！」

男たちは一斉に私達に向かって突っ込んできた。

「ラピス！」

私の声を聞きつけて駆けてきたラピスに飛び乗る。

「レイメイ、勇者を！」

「……わかった。」

擬化……竜羽、と先程の呪文を唱え、空に舞い上がったレイメイは私が並べた肉をものすごい勢いで回収している勇者の荷物を掴んで一緒に引き上げる。

「肉！ 俺の肉がアー！！！！」

「諦めろ、勇者！ 取り敢えず逃げるぞ！」

私はラピスを操り、人垣を飛び越えて走り出す。

「追え！ 逃がすな！！！」

おおおおと地面も轟くような声を発しながら毛皮の者達は追ってくる。

「げえー、あいつら『ソラガミさま』とか言っておきながら滅茶苦茶肉踏んでやがる。死ね！」

勇者は自分を取り残した肉を恨めしそうに見ながら、悪態をついた。後で回収するつもりだったのであるうか。私はラピスの腹を蹴って速度を速める。

「あれは……ここの者……。」

「ん？ 何か知っておられるのか？」

だんだんと遠くになっていくかの者たちを木々の間に見、隣を飛ぶレイメイに視線を移す。

「……………、昔、な。」

レイメイの「昔」とは、彼がピースフル・ブラックであった時のことであろうか。それとも、それ以前の……。

「へえ、れーめーちゃんもヘンピなトコくんだねー、ひひひ、まあんたは自分でどうこう出来ねえしな。」

「勇者！」

レイメイが自らの「昔」を良くは思っていないのは分かっていた。王につかえていた時は分からないが、それ以前の、彼の出身であるエドナの事を話す彼の表情はいつもまるで苦虫を噛み潰すかのようだった。

私はレイメイに昔の事を聞こうとは思っていない。我々の旅の目的はあくまで魔王討伐……とはあくまで建前にすぎないのだが。本当は私も少し彼に同情しているのではないだろうか。レイメイはきっと私に憐れまれるのを嫌うだろう。私はそれが露呈するのが苦しかった。

「……………。」

レイメイは私たちのやり取りなど聞いていないかのように遠くを見

ている。

「あーあー、もうダイジョーブだろ。おろしてくれよ魔法使いさんよー。」

「……ん？ あ、ああ。」

森の中をひた走っていた私たちは完全に人の声がなくなったのを確認して立ち止った。

「はあー、もったいねえーことしたぜ。」

勇者は手に持っていた竜の肉の一つに齧りつきながら悪態をつく。

「勇者、あまり生で食べるものではないぞ。」

私は勇者をたしなめたが、腹をすかせた上に腹の底では怒り狂っているであろう奴が私の言うことを耳に入れるはずもなかった。

「ぐぐぐ、ぎぎ」

森の中のテントは蒸れて寝苦しいことこの上ない。私はいつも通り夢と現の間をゆらりゆらりさ迷っていた。いつもは私がまどろむころに伸びてくる勇者の腕が、いつまでたっても現れないことに少し違和感を覚えつつも、久々の安眠の予感に意識は遠く離れてゆく。

「ぐぐ、か」

しかし、奇妙な音に私は体を持ち上げた。暗闇に慣れぬ目で狭いテントの中を見回す。レイメイはいない。彼はいつも眠るころになると行方をくらますのだ。

「……何だ？」

「ぎぎ、オ、オッサン……。」

ぐ、と強く服をつかまれる。勇者の手だ。

「なんだ、勇者？」

またか……。私は少々うんざりしながらそれを振り払おうと手を重ねる。……！？

「な、どうした勇者！？」

勇者の手は焼けるように発熱していた。そして段々とはつきり見えてきた勇者の顔は普段のふざけたそれとは一変して哀れなほど蒼白であった。

「……どうかしたか？」

私の声を聞きつけたのであろうレイメイが、ふ、と後ろに現れた。私はガタガタと震える勇者を引き寄せて抱き締める。

「勇者の様子がおかしい。かなり熱があるようだ。」

勇者は激しく呼吸を繰り返し、痛いほどに私の背に爪を立てる。

「……伝染病かも、しれない。離れた方が……いい。」

レイメイは私から勇者を引きはがそうとするが、勇者は私にぴったりと張り付いて離れようとしない。

「レイメイ、貴方の力では治せないのか？」

私は勇者を元の寝床に戻そうとするレイメイの手をやりわりと取り、そう問う。

「否……。私は黒魔術、…回復は専門外だ……。」

黒魔術……？ 気になるところではあるが、今はそんな話をしている場合ではない。

「レイメイ、私はこの小憎らしい男を守ってやらなければならない。それが私の義務であり、この国の希望だからだ。」

私がもう一度勇者を強く胸に抱くと、レイメイは私の瞳を見つめた後、その長い指を私の頬に滑らせ、

「……わかった。」

と一言だけ言い置くと闇に紛れて消えていった。その瞬間、私の脳内にある情景が浮かび上がる。原始的な家の中だ。白髪で立派な白ひげ口蓄えた翁が黒髪の少年に薬らしきものを調合している。彼はイノシシの毛皮を被っていた。

「勇者、大丈夫か？」

私は胸に顔を埋める勇者に声をかける。その褪せた金髪は汗でぐっしりと濡れていた。その髪を掻き揚げてやる。

「……オッサン……。」

震える声に私は腕の力をひときわ強くする。私の胸の中で、勇者は私の服を強く握っている。

「油断しまくり何じゃねーの？」

「は？」

気づけば勇者に押し倒されて……いない。

「あ、あれ、なんで、」

「熱があるからだ馬鹿者。」

昼間のドラゴンの肉が当たったのであろうか。今になってぼんやりとそんなことを思った。

「その調子なら大丈夫そうだな。ほら、もう寝ろ。」

「……畜生っ、」

勇者は悪態をついてすぐに毛布にくるまってしまった。こんなことならわざわざレイメイに助けを求めに行ってもらうまでもなかったかもしれない。

そこから静かな時間が流れる。勇者の吐息は相変わらず少し上がっているかのようだ。

勇者が病気なら自分の身は安全だ。不謹慎ながらも私の心は肩の荷が下りたように弛緩していた。私もこのテントの中で勇者から最も離れた場所にある自分の寢床に勇者に背を向け横になる。実際はすぐ隣のだが。すぐに眠気が襲ってくる。

「……なあ、オッサン。」

「なんだ、まだ起きていたのか。」

寝ろ、と口にしようとした瞬間、後ろから抱き締められた。

「……………」

何も言わずじっとしていると、すぐに静かな寝息が聞こえてきた。背中に、額をこすりつけられる。

もう新しいとは言い難いテントの隙間からもれる朝の光の中、私は今度こそ眠りに就いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1097g/>

私が勇者を倒すまで。

2010年10月9日19時46分発行